



石見銀山から尾道、笠岡、二つのルートへと続く石州街道。急峻な山道をたどり、ようやく見えてくるのが、律令時代に備後国の国府が置かれた歴史ある古都、府中の町並みです。長旅に疲れた人々にとっては何ともほっとするこの町はまさに山からの「出口」です。

「三室橋」から出口川に沿って緩やかに曲がりながら続く石州街道出口通り。街道沿いには黒壁や土壁の建物が点在し、茶屋跡や石州街道入口の石碑などが散在しています。



恋しきは、明治5年に創業した料亭旅館を再利用した施設です。760坪の敷地内には本館と4つの離れに囲まれた300坪の日本庭園があり自由に散策していただけます。本館個室は様々な用途での貸館としての利用も可能です。また、くつろがれる方にはカフェや料亭「そ 恋しき」もあります。



地上総高9メートル、笠石面積7.4平方メートル(4畳半)に及び、長い歳月をかけ1841年に完成しました。

人やものの流通で賑わう重要な道であったことが分かります。

通りに肩を寄せ合うように並ぶ家はほとんどが商家だったそうです。府中は江戸時代に上月氏が開墾やたばこ、桐工芸、織物、染め物などを奨励し、今も続く地場産業の基礎をつくった伝統ある「ものづくりの町」です。間口の広い平入り、むくり屋根、うだつ、繊細な格子などに当時の繁栄ぶりが偲べれます。



江戸時代、徳川幕府の直轄地として、また石見銀山へ続く石州街道の宿場町として栄えていた「上下」。幕府を後ろだてとした金融業で栄えた白壁の町並みと呼ばれる商店街を歩くと、当時の威容を偲ばせるなまこ壁や格子などを持つ町屋が並び、まるで時間が止まったかのような、歴史的な景観を楽しんで

いただけます。町並みの中には、女流文学者・岡田美知代の生家を改築した上下歴史文化資料館、広島県文化百選の一つである上下キリスト教会、金融業で財を成した旧田辺邸や、見張り櫓がそのまま残る旧警察署等があります。



明治時代、当時の財閥角倉家の蔵として建築されたものです。戦後は、上下キリスト教会として利用されてきました。広島県文化百選選定建築物でもあり、上下のシンボルの建物の一つです。



明治の文豪、田山花袋の小説「蒲団」のヒロインとなった岡田美知代の生家です。花袋は、この家を訪れたとき思い出を紀行文「備後の山中」に詳しく記しています。



白壁の町並みの中にある明治時代の建物で、警察署の面影を伝える特徴的な見張り櫓が当時の姿のまま残っています。田山花袋が「備後の山中」のなかで、その印象を記しているものです。



江戸時代の町屋のひとつ。当時は、掛屋(幕府の公金を扱うところ)を営んでいましたが、明治時代に入る頃には造り酒屋を営んでいました。時代が進むにしたがい増改築も続けられ、各時代の様式が随所に見られる生きた博物館となっています。

